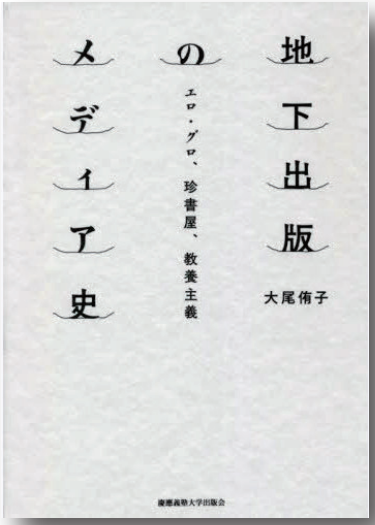
GUNMA PREFECTURAL LIBRARY
群馬県立図書館
# 新収蔵資料抄
Vol. 20
2022/ 8/5 発行
不定期刊




**最寄り図書館に取り寄せ可**

## 地下出版のメディア史　エロ・グロ、珍書屋、教養主義

大尾 侑子／著　慶応義塾大学出版会　2022.3　本文 465p　22cm
023.1/ ネ 23　2022.5.20 受入　定価 4,500 円＋税

（目次情報は裏面参照）

資料概要

戦後出版には、高級文化としての岩波、低級文化としてのカストリ雑誌という二極のほかに、第三極としての「高級文化としてのエロ・グロ」と呼びうるジャンルがあったという。戦前の性風俗・性科学研究の系譜にあって、江戸川乱歩や亀井勝一郎、菊池寛などが関わって戦後に発行された『猟奇』や『赤と黒』などの雑誌群である。

これらは、その後の「エロ読み物を中心とした本当のカストリ雑誌」とは一線を画すもので、その源流は宮武外骨と並び称されたライターかつエディターの梅原北明（1901-1946）を中心とするメディア文化圏だった。

本書では、昭和初期の梅原とその周辺の知的ネットワークに着目し、性文化探究の系譜を辿ることで、高級文化としてのエロ・グロを標榜したメディア文化圏の知的水脈の源流と、そこに通底する「教養観」を明らかにする。

赤（左翼文学）と桃色（エロ出版）を往還した物書き・梅原は、1920 年代以降に著述家として表立った活動を始め、新聞記者、雑誌記者としての著述のほか、小説『真面目な放浪者』を執筆している。また、1924 年にはマーガレット・サンガー、ハヴロック・エリス、マリー・ストーブスの訳本を出版した。後には出版社「文藝市場社」を率い、叢書『変態十二史』、雑誌『変態・資料』で「珍書屋の総元締め」として業界にその名を轟かせた。

梅原らの地下出版の人脈は、菊池寛に反目した今東光が興した反文壇雑誌『文党』の同人や、プロレタリア芸術運動、アヴァンギャルド芸術運動にまでたどり着くという。梅原らが行ったサンドイッチマンに扮した示威行列や原稿の叩き売りなどの奇矯な販促活動、さらにはエロ出版を退いた後に演劇で挑戦的な試みを続けたこともうなずける。

文壇を批判し官憲におもねらずそれらを揶揄して、また一方で円本やカストリ雑誌を蔑視しながら、エロ・グロを研究と称して追求した梅原らの地下出版は、皮肉なことに戦後エロ・グロのカストリ雑誌が一世を風靡すると、それに押されて衰退するという歴史を辿る。

本書では、高級文化としてのエロ・グロの担い手は、紛れもないインテリで知識人、つまり教養人だったことが丁寧に描かれるが、逆に、彼らを出版に突き動かしたものが、制度的教育によって習得される学校的教養というべきものへの嫌悪だったことも明らかにされる。彼らは江戸の粋にも通じるダンディズムや道楽をもって、学校の外部をエロやグロとして、社会の外部を魔術や魔境として志向しながら「人を教育しない（高級な）文化」を実践したのである。

全編にわたり「変態」「エロ」「秘密出版」「グロテスク」「尖端」「談奇」「猟奇」などの刺激的な言葉が並ぶ本書。現代と異なる位相で使われたり、ニュアンスを異にしたりするこれらの言葉が、当時意味していた内容を理解するテキストとしても興味深い。

また、本書は型破りな梅原北明の魅力を伝える本でもある。唐十郎が戯曲の、野坂昭如が小説の主人公に据えたのも、この魅力のためだろうと納得させられる。

> …北明にとって、編集という行為そのものが挑発的パフォーマンスだった。このパフォーマンスは、神出鬼没、奇想天外で、まさにトリックスターと呼ぶにふさわしいドタバタ劇まがいの行為であった…
>
> 山口昌男『「挫折」の昭和史』

著者紹介

大尾 侑子（おおび ゆうこ）

1989 年東京都生まれ。桃山学院大学社会学部准教授。2014 年、東京大学大学院学際情報学府博士後期課程満期退学、博士（社会情報学）。

主要業績に、「デジタル・ファンダム研究の射程―非物質的労働と時間感覚にみる「フルタイム・ファンダム」」（『ポストメディア・セオリーズ―メディア研究の新展開』ミネルヴァ書房、2021 年）、「「白ポスト」という文化装置―兵庫県尼崎市における有害環境浄化活動のフィールドワーク」（『新社会学研究』5 号、新曜社、2021 年）など。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料（図書資料・視聴覚資料）から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。
なお、本紙の内容は Web にも掲載しています。ご覧の際は右の QR コードをご利用ください。
また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

群馬県立図書館　〒371-0017 前橋市日吉町一丁目９－１　電話：027-231-3008

目 次

序章　教養主義の「裏通り」
1　知的上昇と、「エロ・グロ」の交差点
2　先行研究と本書の立場
3　用語の定義―「地下出版界」を捉えるためのキーワード
4　分析方法
5　本書の構成

第一部　地価出版界の前史

第一章　＜社会運動＞としての自費出版同盟
―毒舌和尚・今東光と雑誌『文党』の挑戦
1　軟派出版前史――『文党』の創刊
2　文壇のオルタナティブを目指す
3　街頭でのパフォーマンスと超党派性
4　「自費出版同盟」構想の内実
5　構想の失敗と、軟派出版への新たな兆し

第二章　文藝市場社の「誕生」
―烏山朝夢から梅原北明へ
1　梅原北明という演出者
2　「赤色」と「桃色」を往還する
3　朝香屋書店から文藝市場社へ

第三章　「直筆原稿」のメディア論
―文藝市場社の設立と直筆原稿叩き売り
1　梅原北明と雑誌『文藝市場』の誕生
2　雑誌『文藝市場』の創刊
3　＜破棄される原稿＞への想像力
4　アヴァンギャルド芸術と労働争議のなかで
5　軟派出版界への足掛かり

第二部　地下出版界の成立過程

第四章　＜変態＞な教養／教養としての＜変態＞
―逆立ちした教養主義
1　＜変態＞という新規財貨
2　カタログ化される＜変態＞
3　「趣味的研究」の系譜と趣味家のエートス
4　逆立ちした教養主義
5　水平的な連帯の愉しさ―「珍妙変態行楽」の開催
6　「反‐教化メディア」の教養観

第五章　愛書趣味のオブジェとしての書物
―軟派出版界と限定本の快楽
1　愛書趣味の涵養
2　伊藤竹酔と軟派出版界
3　円本と大衆的教養の時代
4　艶本叢書の登場と予約全集／円本との差異化
5　「あるべき書物像」の体現
6　パラテクストを通じた愛書趣味の涵養

第六章　＜談奇＞の表象と東アジア
―理想郷イメージとしての上海
1　東アジアに向かう視線
2　「上海」へのまなざし
3　「国際的な一歩」としての上海移転
4　＜談奇＞のネットワークと「近代」への応答
5　「東アジア」に広がる地下出版界

第三部　地下出版界の成熟と瓦解

第七章　「地下出版界」の最期
―大衆化するエロ・グロ・ナンセンスと珍書屋の受難
1　広がりゆく「エロ・グロ・ナンセンス」
2　軟派出版界に吹く“受難の嵐”
3　「高級エロ」による「通俗エロ出版」批判
4　軟派出版史の構築と「正統」化の実践
5　「地下出版界」の成熟と「場」の瓦解

第八章　「裏道の文化」の行方
―戦後に残された軟派出版界の残滓
1　戦時下の「梅原北明」を辿る
2　カストリ雑誌に現れた「斯界の権威」
3　＜アブノーマルの共同体＞へ
4　一九六〇～一九七〇年代、「アングラ」文化に見る足跡

終章　「攪乱」する思想としての地下出版
1　メディア文化圏としての「高級エロ」出版
2　軟派出版史を描き出す―メディア史研究への視座
3　「趣味的研究」のネットワーク―社会学領野への視座
4　本書の可能性と限界―地下出版界は、「知的共同体」たりえたか？
5　「教養主義の裏通り」の隘路、受け継がれる「好色の魂」

注
付録　昭和「地下出版界」関連年表―梅原北明とその周辺
あとがき
参考文献一覧
図版出典一覧
人名索引

## 県立図書館所蔵 関連資料

| タイトル | 責任表示 | 出版者 | ページ数 | 出版年 | 資料コード |
|---|---|---|---|---|---|
| 日本近代における<国家意識>形成の諸問題とアジア | 遠藤薫／編著 | 勁草書房 | 285p | 2019 | 13521323 |
| 雑誌メディアの文化史 | 吉田則昭・岡田章子／編 | 森話社 | 305p | 2012 | 13214929 |
| 野坂昭如ルネサンス1　好色の魂 | 野坂昭如／著 | 岩波書店 | 222p | 2007 | 12767042 |
| 「挫折の昭和史」 | 山口昌男／著 | 岩波書店 | 420p | 1995 | 05570619 |

※ 梅原北明が登場する唐十郎の『海の牙- 黒髪海峡篇』は、県内では前橋市立図書館、館林市立図書館、群馬県立女子大学が所蔵。

群馬県立図書館　〒371-0017 前橋市日吉町一丁目９－１　電話：027-231-3008